

令和 2 年 7 月 11 日現在

機関番号：32504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370170

研究課題名(和文) 劇的バレエの構成原理の形成過程の研究

研究課題名(英文) Dramatic ballet: the foundations of its composition

研究代表者

譲原 晶子 (Yuzurihara, Akiko)

千葉商科大学・政策情報学部・教授

研究者番号：80283224

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀に劇的バレエ作品の原型が形成されていったその過程について、宮廷バレエ、オペラ・バレエなど17世紀の宮廷文化に由来する側面と、オペラ・コミックをはじめとする18世紀の大衆娯楽に由来する側面の両側面から明らかにした上で、これまで18世紀バレエの重要文献として捉えられていたノヴェールの『舞踊とバレエについての手紙』(1760)の内容を再検討した。また、現代の観客にもよく知られるドベルヴアルの『リーズの結婚』(1789)を取り上げ、18世紀の啓蒙思想家ドゥニ・ディドロによる演劇理論がこの過程に与えた影響を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ノヴェールの著作を中核にした従来の18世紀バレエ史研究に対して、本研究は、17世紀のバレエおよび18世紀という時代がアクション・バレエの成立に果たした役割を包括的に捉え、現代われわれが見るバレエの諸原理の淵源を明らかにすることができた。またこれを通して、「アラベスク」を非難したノヴェールの立場、すなわち舞踊を模倣芸術として確立しようとした彼の立場のバレエ史における特異性が、逆に浮き彫りになった。バレエ史を通してバレエに寄り添い続けてきたこの概念を手がかりに、近代芸術と舞踊芸術の関係性が開示されることになれば、それは芸術の新たな在り方を考える契機となりえ、その社会的意義は極めて大きい。

研究成果の概要(英文)：In this research I examine and seek to throw light on the process by which the foundations of dramatic ballet were formed in the 18th century, from elements originating in 17th-century courtly culture, such as court and opera ballets, and from others derived from 18th-century popular performance spectacles, such as comic opera. The research revisits the contents of Noverre's *Lettres sur la danse, et sur les ballets* (1760), which is regarded as one of the most important 18th-century literary sources on ballet. The research also illustrates the influence on this process of the dramatic theory of the 18th-century Enlightenment philosopher Denis Diderot, focusing on a ballet well-known among modern audiences: Dauberval's *La Fille mal gardee* (1789).

研究分野：美学・芸術学

キーワード：18世紀バレエ バレエ・パントマイム オペラ・コミック 舞台タブロー デイドロ ノヴェール メネストリエ ステュー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

舞台芸術のなかでも「アクション・バレエ」は身体表現に依存する。言葉を使わずにどのように物語を伝達するのかについて、このジャンル誕生以来問題にされ続けてきた。アクション・バレエの作品の構成原理とはそもそもどのように捉えられていたのであろうか、またそれはどのように形成されてきたのだろうか。

この問いとともに報告者はそれまで、18世紀後半の演劇論において盛んに取り上げられた「タブロー」の概念に着眼してきた。演劇のタブローとは、絵画をモデルに舞台の場面を構成するものである。この概念は、身体演技を重視する新しい演劇論を提唱したディドロ Denis Diderot によって提示された。また同時期に、アクション・バレエの先駆者として知られるノヴェール Jean-Georges Noverre もその著『舞踊とバレエについての手紙』*Lettres sur la danse, et sur les ballets* (1760) で絵画を規範とする舞踊論を展開している。アクション・バレエの確立期は演劇で無言の演技が注目され始めた時期と重なり、一般にノヴェールは新時代の舞台芸術を担う同志としてディドロと一括りに扱われる傾向にある。

ところが、ノヴェールの著作を詳細に検討してみると、彼は「17世紀の宮廷バレエを批判しながらもその舞踊理論を参照にしている」こと、「彼のタブローの使用法はディドロとは大きく異なっている」ことに気づかされる。また、「バレエはタブローである」とは17世紀のバレエ理論家たちも述べていることであり、ノヴェールが主張しはじめたことではない。劇場バレエは宮廷バレエを受け継いだものであり、アクション・バレエの形成過程を明らかにするには、18世紀思想からの影響に加え、17世紀のバレエからの連続性を考察するのは必須であり、つまり、従来のように18世紀的な文脈のみからこれを考察するのではなく、むしろそれから一旦切り離し17世紀バレエとの繋がりという文脈において捉えた上で、再度同時代の新しい演劇論と結びつける、という手順が不可欠であると考えた。

## 2. 研究の目的

アクション・バレエについてはこれまで、18世紀のその黎明期に出版されたノヴェールの前掲書における言説を中心に理解されてきた。本研究では、この書を批判的に読み直すことで、18世紀バレエにノヴェールの果たした役割を相対化する。まず、18世紀のアクション・バレエと17世紀の宮廷バレエの関係性を明らかにした上で、前者はどのような点で前時代のバレエ様式と比べ新しいのか、再検討する。また、18世紀の思想的背景や劇場を巡るさまざまな状況のなかで18世紀に上演されたさまざまな舞踊劇(大衆演劇を含む)の形態を把握し、そこにもアクション・バレエが舞台芸術の一ジャンルとして成立してゆく形成過程を見出す。

## 3. 研究の方法

### (1) アクション・バレエと宮廷バレエの関係を捉える

まず、メネストリエの『古代と現代のバレエ：演劇の規則に準じて』*Des Ballets anciens et modernes selon les règles du théâtre* (1682) など、17世紀のバレエ理論書に取りあげられた主要概念および作品の概説を検討することで、宮廷バレエにおける作品の規範を把握する。そして、それらがノヴェールの著書にどのように引き継がれているか、あるいは批判されているかを調べる。次に、アクション・バレエの作品形態を、それ以前の二つのバレエジャンル、宮廷バレエ、オペラ・バレエのものと比較して、3つのジャンルの繋がりを把握する。そして、この繋がりのなかで、アクション・バレエの理論的位置付けを、カユザック Louis de Cahusac の『古代と現代の舞踊』*La danse ancienne et moderne* (1754) など当時の文献から把握する。

## (2) 18世紀の大衆演劇にアクション・バレエの誕生の契機を見出す

18世紀前半を代表するオペラ座のダンサー、マリ・サレ Marie Sallé (1707-56) は旅芸人一座の出身であり、ノヴェールも活動初期にはオペラ・コミック座で仕事している。定期市芝居をアクション・バレエの作品形態が形成される契機の一つとして視野に入れ、ここで上演された関連作品（とくにバレエ・パントマイムと題された作品）の内容および構成について、当時の文献から把握する。

## (3) デイドロの演劇論を研究する

18世紀中葉に書かれたデイドロの演劇論、『私生児対話』*Entretiens sur le Fils naturel* (1757) と『劇詩論』*De la poésie dramatique* (1758) の中で展開されている「タブロー」を巡る議論を掘り下げて検討する。それを通して、デイドロの言う舞台「タブロー」とノヴェールの言う「タブロー」の差異を明確にし、前者のアクション・バレエへの影響を明らかにする。

## (4) 劇場機構の変化を研究する

フランスでは17世紀からプロセニウム舞台が導入され始めたが、18世紀に入っても舞台美術の基本は「書き割り」であり、それが practicable と呼ばれる実体をもつ舞台セットに移行していったのは、18世紀も末のことである。こうした18世紀の劇場機構の変遷とその作品への影響について調べ、18世紀における舞台タブローの在り方の変容について考察する。

## 4. 研究成果

### (1) 宮廷バレエとアクション・バレエの関係について

舞踊は「アクション」を表現するとは17世紀のバレエ理論書にも明示されていたが、そこにはバレエの詩学と演劇の詩学との間には明確な違いが打ち出されていた。「上演で楽しませる」バレエは多様性を要するため「三統一」の規則は適用できず、多様な要素が一つの主題の下に関連し合う「構想の統一」を必要とする。宮廷バレエ理論は「バレエは劇である」と言うが、それは舞踊家が役柄を表現するというにすぎず、個々の舞踊家（同一の登場人物は、同じ衣装では一度しか登場できない）は行為を表現しても、作品全体は一連の行為は描かない。また役柄は演技ではなく衣装により（アレゴリー）表現される（ノヴェールは『手紙』でこの点を批判）。このように見ると、宮廷バレエは物語画（寓意画）に類似しており、そこには擬人化された視覚像を解釈する楽しみが与えられていることがわかる。

多様性を重視する「構想の統一」則とは、バレエでお馴染みの構成法「ディヴェルティスマン形式」を基礎づけていると言えるであろう。ノヴェールも「多様性」をバレエの本質的要素と捉えているという意味では、この詩学を受け継いでいる。オペラ・バレエの時代には、バレエは独立した小品のセット作品として構成されるようになった。この時、筋書は軽微だが一貫した筋をもつ、「劇」としての形式が固められていったと言えよう。その一方で、それは喜劇集という形で宮廷バレエの形式的特徴（＝ディヴェルティスマン形式）をとどめ、多様性という質を担保している。それが、一つの主題に多様な要素を提示するというバレエ詩学の理念を達成していると言えるかどうか覚束ないが、オペラ・バレエは、一つの作品の中で「演劇性」と「多様性」をうまく折衷させる形式をとっているということは理解できる。

このように、宮廷バレエの時代からアクション・バレエの誕生期にわたり、バレエでは「演劇性」と「多様性」の両方が - 両者は異なる統一則（「三統一」と「構想の統一」）で実現されるにも関わらず - 重視されてきた。つまり、アクション・バレエの作品のなかには二つの相矛盾する形式（「劇」と「ディヴェルティスマン」）が混在していることになる。このことが、ア

クシオン・バレエは劇であることを目指しながらも劇的とは言い難い質を引きずる、その原因をなすと理解できる。この研究の成果は、査読付き論文「バレエ・ダクシオン成立前史におけるバレエの演劇性」:『美学』248 に公表した。

#### (2) ノヴェールの『手紙』と17世紀バレエの関係について

ダンス・アナクシオン *danse en action* の概念を導入したカユザックの舞踊理論は、音楽劇を前提に、舞踊がその主要なアクションをいかに構成できるかという点に焦点が当てられている。そこには、宮廷バレエの詩学が取り組んだバレエ独自の作品構成法はもはや考慮されておらず、彼の舞踊論には17世紀のバレエ詩学は継承されていない。ノヴェールの『手紙』には「多様性」や「構想の統一」が主張され、そこでは明らかにメネストリエのバレエ理論が参照されているのだが、その一方で、彼はカユザックのバレエ・アナクシオンの構想を受け継ぎ、それを体現しようとしている。その結果、ノヴェールの『手紙』の議論は矛盾を呈し、内容を捻じ曲げた引用すら含まれているのに気づかれる。この研究成果は、これまで18世紀バレエのバイブルのように扱われてきた『手紙』に対して、新たな読み方を提示するものであり、査読付き論文「メネストリエのバレエ理論からみたノヴェール」:『美学』244 に公表した。

#### (3) 18世紀の舞台芸術を巡る思潮について

「タブロー」「パントマイム」といった演劇の視覚的側面、そして文学としての劇ではなく実演としての演劇という側面に注目が集まった時代という観点から18世紀の舞台思潮を概観するために、グデン Angelica Gooden の *Actio and Persuasion, Dramatic Performance in Eighteenth-century France*, Clarendon Press, 1986 を邦訳、刊行した(『演劇・絵画・弁論術:18世紀フランスにおけるパフォーマンスの理論と芸術』筑波出版会, 2017)。とくに本書は、大衆演劇についても詳しく論じられており、これに関連する学術的知見を広く紹介することができた。

#### (4) デイドロとアクション・バレエの関係、ノヴェールとの関係について

劇作法が(読まれる作品ではなく)上演する作品を創作する方法であるならば、そこには、上演で演者と観客のコミュニケーションをいかに成立させるか、という構想が含まれていなければならない。こうした立場から観客論を真っ向から論じたのがデイドロであるが、彼の演劇論はアクション・バレエにおける観客論、創作理論としても読むことができると思われた。『劇詩論』で彼は、観客が劇の事情に通じ結末すら知らされていることの重要性を主張するのだが、それはデイドロが(バレエの観客のように)物語を超えた何かを舞台に求めたからである。彼は筋書きが単純な劇を推奨する。18世紀には、筋展開が存在しないほど単純な劇としてモノドラマというジャンルがあった。このジャンルと『リラの園』などの20世紀初頭の劇的小品バレエの類似性を明らかにすることで、18世紀の演劇論および演劇実践がいかにアクション・バレエを生む素地を有していたかを明らかにした。この成果は、査読付き論文「言表行為なき劇的作品 ゲーテのモノドラマ『プロゼルピーナ』の構造」:『演劇学論集』紀要60 に発表した。

ノヴェールは、自然な演技や本当らしさを求めるという点ではデイドロと立場を同じくするが、「タブロー」に関する議論では両者の共通点は薄い。ノヴェールは遠近法による人物配置や配色法に留意し、舞台を二次元の画面に構成することを強調する。一方、デイドロの『私生児』はプロセニウム舞台ではなくサロンが演技空間であり、彼の「タブロー」とは舞台セットを睨んで論じているように読める(ちなみに「タブロー」の語は、後に「場」に代わる幕区分の概念として使われるようになる)。またノヴェールは、バレエを17世紀の画家ルーベンスの連作画に喩え、スライド・ショー的なものとして捉えるが、デイドロは、タブローを劇の特定の局

面で効果を担うものとして捉え、その効果を「ク・ド・テアトル」の効果と比較している。

本研究を通して、ドベルヴァル Jean Dauberval のバレエ『リーズの結婚』*La Fille mal gardée* (1789) の大団円で、ディドロ的なタブローが使われていること、また類似のタブローがスデーヌなどのオペラ・コミック作品に使用されていることに気づいた(スデーヌは舞台セットにも工夫を凝らしている)。また、このディドロ的なタブローの手法は19世紀のメロドラマ作品にも使用されている。ここにディドロ、スデーヌ Michel-Jean Sedaine、ドベルヴァル、ピクセルクール René-Charles Guilbert de Pixierécourt という「タブロー」の系譜を捉えることができる。そして、これらの「タブロー」の特性を明示することによって、そのノヴェール「タブロー」との違いを明示することができた。この研究は、査読付き論文 Diderot, Sedaine, Dauberval: *La Fille mal gardée* and Diderot's Stage Tableau としてアメリカの学術雑誌 *Dance Chronicle* に投稿し、そこで示したディドロの舞台タブローに関する新しい見解は査読者および雑誌編集長から高い評価を受けた。

#### (5) その他の成果について

ノヴェールの著作を批判的に読むことで、彼が「アラベスク」を徹底非難していることがバレエ史にとって非常に象徴的なこととして映った。アラベスク画は、ノヴェールが拠り所とした模倣原理による絵画ではないので、彼がこれを非難するのは当然である。しかし「アラベスク」はアクション・バレエが誕生する以前から、またその誕生後の19世紀以降も、舞踊にとって重要な概念であり続けた。17世紀のオペラ座で舞台美術を担当していたベランはアラベスク画家であった。18世紀には「グロテスク」(アラベスクと同義)はバレエのジャンルを表す用語であった。また1820年にはブラーシス Blasis がバレエの「アラベスク」を定義し、ロマンティック・バレエの時代が幕開けへと進んだ。そして19世紀末に「アラベスク」の語が現在のポーズの意味で使用されるようになり、それはまさにバレエを象徴するポーズとなった。

ノヴェールのバレエ改革は、バレエを模倣芸術として確立することであった。しかし、舞踊自体は、それ以前もまたそれ以後も、模倣とは別の次元において展開し続けてきたのであり、まさに舞踊と「アラベスク」の結びつきそのものがこのことを示唆している。舞踊と「アラベスク」の関係は謎に包まれている。バレエ史を通してこの概念がバレエに寄り添い続けてきたことの意味が明らかにされ、そして近代芸術と舞踊芸術との関係性が開示されることになれば、それは近代芸術とは異なる芸術の在り方を考える、一つの契機になり得るかもしれない。これは、今後探求されるべき重要な課題である。これまでのところの研究成果は、査読付き論文「バレエにおけるアラベスクとグロテスク」、『美学』252において発表した。

以上のように、ノヴェールの『手紙』に記された言説を相対化するという当初の目的は達成され、この書の新たな読み方を提示するとともに、アクション・バレエの形成の過程をいくつかの視点から示すことができた。アクション・バレエに見られる宮廷バレエの名残について創作論の次元で明示し、またアクション・バレエが形成される契機としてオペラ・コミックの役割についても明らかにすることができた。ディドロのタブローとノヴェールのタブローの差異について本研究が示した新たな見解は、国際的な評価を受けることができた。

本研究を通して得られた知見から、改めて現在我々が見るバレエを見つめ直すと、そこには18世紀バレエとの本質的な繋がりを読みとることができる。これらについては、現在著書にまとめているところである。そして、「アラベスク」の概念がバレエの歴史にどのような役割を果たしてきたのかという問いが、今後の研究課題として残された。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 讓原晶子	4. 巻 252
2. 論文標題 バレエにおけるアラベスクとグロテスク	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 121-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 讓原晶子	4. 巻 248
2. 論文標題 バレエ・ダクシオン成立前史におけるバレエの演劇性 「劇的バレエ」は劇的か	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 讓原晶子	4. 巻 60
2. 論文標題 言表行為なき劇的作品 ゲーテのモノドラマ『プロゼルピーナ』の構造	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 演劇学論集	6. 最初と最後の頁 39-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 讓原晶子	4. 巻 248
2. 論文標題 バレエ・ダクシオン成立前史におけるバレエの演劇性 「劇的バレエ」は劇的か	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 譲原晶子	4. 巻 53-1
2. 論文標題 ゲーテにおけるdramatischの概念	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 千葉商大紀要	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 譲原晶子	4. 巻 244
2. 論文標題 メネストリエのパレ工理論からみたノヴェール 『舞踊とパレエについての手紙』 (1760) における借用をめぐって	5. 発行年 2014年
3. 雑誌名 美学	6. 最初と最後の頁 121-132
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Yuzurihara	4. 巻 37-3
2. 論文標題 Historical and contemporary Schrifftanz: Rudolf Laban and postmodern choreography	5. 発行年 2014年
3. 雑誌名 Dance Chronicle	6. 最初と最後の頁 288-311
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/01472526.2014.957628	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Yuzurihara	4. 巻 43-2
2. 論文標題 Diderot, Sedaine, Dauberval: La Fille mal gardee and Diderot 's Stage Tableau	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Dance Chronicle	6. 最初と最後の頁 107-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/01472526.2020.1757938	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 譲原晶子
2. 発表標題 イリ・キリアンの舞台外空間 奥行きの間と舞台袖
3. 学会等名 西洋比較演劇研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 譲原晶子
2. 発表標題 理論と実践の間で
3. 学会等名 日本舞踊学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 譲原晶子
2. 発表標題 舞踊における「ヴァリエーション」技法の変遷:ダンス・クラシックからポストモダンへ
3. 学会等名 舞踊研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 譲原晶子
2. 発表標題 イリ・キリアンの中期作品の空間構成
3. 学会等名 舞踊研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 讓原晶子
2. 発表標題 ピナ・バウシュとフランス
3. 学会等名 日仏演劇協会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 讓原晶子
2. 発表標題 dramatischからtheatralischへ：ゲーテの『ロミオとジュリエット』問題
3. 学会等名 科研費研究中間報告会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 奥香織
2. 発表標題 バレエのリブレットから読みとれること：1660年代の宮廷バレエを中心に
3. 学会等名 科研費研究中間報告会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Angelica Goodden (訳：讓原晶子)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 筑波出版会	5. 総ページ数 337頁
3. 書名 演劇・絵画・弁論術－18世紀フランスにおけるパフォーマンスの理論と芸術	

1. 著者名 加藤哲弘(編)	4. 発行年 2014年
2. 出版社 藝術学舎	5. 総ページ数 pp.211-221 (総392頁中)
3. 書名 芸術理論古典文献アンソロジー西洋篇 (担当: 第28章 舞踊とバレエについての手紙 ノヴェール)	

1. 著者名 山下純照(編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 月曜社	5. 総ページ数 pp.174-180 (総593頁中)
3. 書名 西洋演劇論アンソロジー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	奥 香織  (Oku Kaori)  (30580427)	東京大学・大学院総合文化研究科・特別研究員    (12601)	